

練習問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まだ小学校に通っていたころ、こん虫を集めることが友だち仲間ではやった。自分も母にねだって、かやの破れたので捕虫あみを作ってもらって、土用の日盛りにも恐れず、これをかたにかけて、毎日のように虫とりに出かけた。蝶蛾や甲虫類の一番たくさんすんでいる城山の中をあちこちとながい日を暮らした。

二の丸、三の丸の草原には、珍しいチョウやバッタがおびただしい。少ししげみに入ると樹木の幹にさまざまな甲虫が見つかる。玉虫、こがね虫、米つき虫の種類がかずかずいた。胸をおどらせながらこんな虫をねらって歩いた。

いつか、城山のずっとすそのおほりに臨んだ暗いしげみにはいったら、一株の大きなコクサの木があって、桃色がかった花がこずえを一面におおっていた。散った花は、風にふかれて、みぎわにくちしずんだどろ船に美しく散らばっていた。この木の幹は、ところどころ虫の食い入ったあながあって、あなの口には、細かい木くずが虫のふんとともにこぼれかかって、一種の臭気が鼻をおそった。この木の幹の高いつとところに大きな、みごとなかぶとむしがいかめしい角をたてて止まっているのを見つけたときは、うれしかった。自分の標本箱には、まだかぶとむしのよいのが一つもなかったので、胸をどろかしてあみを上げた。少しあみが届きかねたが、ようよう首尾よくとれたので、こしにつけていた虫かごにいそいで入れて、つつみきれない喜びをい

だいて森を出た。

三の丸の石段の下までくると、向こうから美しいこうもりがさをさした女が子どもの手をひいて木陰伝い伝い来るのに出あった。町の良

い家の妻女であったろう。かさをもらった手に葉びんを下げて、片手は

子どもの手を引いて来る。子どもは、大きな新しいむぎわらぼうしのひもをかわいいあごにかけて、真白な洋服のよなものを着ていた。

自分のさげていた虫かごを見つけると、母親の手を離れてのぞきに来たが、眼をまるくして母親の方へかけて行って、そでをぐいぐいひっぱっていると思うと、また、虫かごをのぞきに来た。母親は、早くお

いでよと呼ぶけれども、なかなか自分のそばを離れない。強いて連れていこうとすると、道のまん中にしゃがんでしまって、とうとう泣きだした。母親は、途方にくれながら叱っている。自分は、そのとき、

虫かごのふたを開いて、かぶとむしを引きだし、道ばたの相撲取草を一本抜いて、虫の角にしっかりしばった。そして、さあ、といって、子どもにわたした。子どもは泣きやんで、きまりの悪いようにうれし

い顔をする。母親は、おどろいて、子どもを叱りながらも礼をいった。自分は、なんだかきまりが悪くなったから、だまって、からになった虫かごを打ちふりながらかけだしたが、うれしいような、惜しいよ

うな、かつて覚えのない心持ちがした。

その後、たびたび、同じコクサの木の下へも行ったが、あのとときのようなみごとなかぶとむしは、もう見つからなかった。あのとときの母子にも、再びあわなかつた。

(寺田寅彦『こくさの木』)

- 注1 かや||蚊を防ぐために、寢室につり下げの目の細かいあみの
おおい。
- 注2 臨んだ||面した。 注3 みぎわ||みぎわ。
- 注4 くち||くさり、形がくずれて。
- 注5 臭気||いやなにおい。くさみ。

問一 線①～⑤のことばの意味を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア むりに
 ウ たいへん多い
 オ どうしていいかわからなくなる
- イ 今までに経験したことがない
 エ わくわくする

問二 線①～③の指示語の指している内容を書きなさい。

①

②

③

④

⑤

問三 線①「毎日のように虫とりに出かけた」のは、いつごろのことですか。

①

②

③

問四 線②「コクサの木」の花は、どんな様子で咲き、どんなところに散っていましたか。

問五 かぶとむしは、(1)何という木の、(2)どんなところにいましたか。また、(3)どんなかぶとむしでしたか。

(1)

(2)

(3)

問六 線③「つつみきれない喜びをいだいて森を出た」理由を書きなさい。

問七 筆者が子どもにかぶとむしをあげる気持ちになった理由として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもがみごとなかぶとむしにひかれ、離れないから。
 イ 子どもが自分のそばを離れないでじやまだから。
 ウ 子どもにかぶとむしをしまったから。
 エ 自分の小さいころを思い出したから。

問八 かぶとむしを子どもにあげた筆者は、どんな気持ちになりましたか。文中から二十五字以上三十字以内で書きぬきなさい。

第5回 詩・短歌・俳句

1 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

信濃

室生犀星

雪といふものは

① 物語めいてふり

こなになりわたになり

② 哀しいみぞれになり

たえだえにふり

また向うも見えぬほどにふる

村の日ぐれは

ともしびを数へてゐるうちに深まる

雪は野山を蔽ひ

野山も見えずなる

こなになりわたになり

哀しいみぞれになり

しんみりとふりつひに歇んでしまふ。

問一 この詩の種類として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 定型詩 イ 自由詩 ウ 散文詩

問二 線①「物語めいてふり」とは、雪のどのような様子をたど

えていますか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雪がさまざまな形でふり、また、そのふり方も多くふったり

少なくふったりする様子

イ 冬のことを書いた物語のように、雪がたえまなくふり続ける様子

様子

ウ 待ち望んでいた雪がふり、期待していたようにいつまでもふり続く様子

り続く様子

エ 冬になると、外に出ることもできずに家で本を読むしかないほど、雪がふり続く様子

問三 線②「哀しいみぞれになり」とありますが、「哀しい」と

いう理由として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア みぞれによって、寒い冬が終わってしまふような気がしたから。

ら。

イ みぞれになることによって、雪の生命が失われるような気がしたから。

したから。

ウ みぞれによって、もう雪がやんでしまふかもしれないと思っ

たから。

エ みぞれを見ることによって、昔の哀しい思い出がよみがえる

ように思えたから。

問四 この詩に表れている作者の気持ちの説明として適当なものを次

から選び、記号で答えなさい。

ア この冬初めてふった雪に、躍動感と喜びを感じている。

イ 静かな風景の中にしんしんと聞こえる雪のふる音に、冬のき

びしさを感じている。

ウ 自分のほかにはほとんど人影も見えない静寂の中で、あたかも雪を生きもののように感じている。

エ 一日中ぼんやりと外の景色を見ているうちに、自分が雪になつたような錯覚を感じている。

2

次の鑑賞文にあてはまる短歌をあとから選び、記号で答えなさい。

① 母に対する作者の思いが伝わってくる歌である。この感動の中にはつらい悲しみがふくまれている。母の今までの苦勞を思うと、これからは幸せにしてあげなければならないと思う作者の思いが伝わってくる。

② 死ぬかもしれないという不安がある。残された者のことを考えると、この苦難をなんとか乗りこえなければならぬと思う、父親のけんめいな姿がこの歌の中にある。

ア 霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の寒きに
落合直文

イ たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて

ウ 三歩あゆまず
隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり
石川啄木

エ 死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはつ天にきこゆる
齋藤茂吉

①

②

3

次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

① (A) に病んで夢は枯野をかけめぐる

② をりとりてはらりとおもき (B) かな

③ (C) をこすうれしさよ手に草履

④ 梅一輪一輪ほどの (D)

まつお ばしよ
松尾芭蕉
いだだこ
飯田蛇笏
よさぶそん
与謝蕪村
はつりんせつ
服部嵐雪

問一 ①～④の俳句の () A～D にあてはまることばとして適当

なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 夏川 イ 菜の花 ウ あたたかさ

エ すすき オ つめたさ カ 旅

キ 名月

A	B
<input type="text"/>	<input type="text"/>
C	D
<input type="text"/>	<input type="text"/>

問二 ①・④の俳句の季語を書きぬき、その季節を漢字一字で書きな

さい。

① 季語	④ 季語
<input type="text"/>	<input type="text"/>
季節	季節
<input type="text"/>	<input type="text"/>

問三 次の鑑賞文にあてはまる俳句を①～④から選び、番号で答えなさい。

○ ほとつた足にふれる水のここちよさが伝わってくる句である。